

令和2年度文部科学省委託事業

青少年を取り巻く有害環境対策の推進（ネット対策地域スタートアップ事業）

青少年のネットトラブル防止大作戦

ひょうごネットトラブル防止ワークショップ

スマホサミット

in ひょうご2020

報告書



公益財団法人

兵庫県青少年本部

Hyogo Youth Services Administration

■「ひょうごネットトラブル防止ワークショップ」事業概要

兵庫県では、県内すべての人々が青少年のインターネット利用に関する基準（ルール）づくりを支援する努力義務や、フィルタリング利用・有効化措置の原則義務化を青少年愛護条例に規定するなどして青少年のインターネット利用対策に取り組んでいる。

その一環として、青少年が主体となってインターネット利用の現状への具体的な対応策を考えるワークショップとその活動結果を発表する全県大会「スマホサミットinひょうご」を開催し、青少年が安全に安心してインターネットを利用できるよう、大人と子どもがともに考え、学び、取組の輪を広げる機会とした。

■成果目標

- ・ 青少年が、安全に安心してインターネットを利用するために必要となる視点等について学ぶワークショップを開催し、青少年による主体的な取り組みを推進する。
- ・ 大人と子どもが一緒になって考える全県大会を開催し、青少年が考えた安全・安心なケータイ・スマホの使い方や、効果的なルールづくりのポイントに関する提言を行い、地域での青少年による主体的・効果的なルールづくりの取組を推進する。
- ・ これらの取り組みを周知することにより、青少年のインターネット利用対策や主体的なルールづくりの深化を図り、青少年の安全・安心なインターネット利用環境整備の一助とする。

■事業概要

①ひょうごネットトラブル防止ワークショップ（全3回）

※新型コロナウイルス感染拡大防止の観点から、第1回、第2回はZOOMによるオンライン開催

- ・ 参加対象 兵庫県内に在住、在学の小・中・高校生
- ・ 参加者 小5～高3 8校1団体 63名
(小学生:3名、中学生:21名、高校生:39名)



②スマホサミットin ひょうご2020

令和2年12月13日（日）13:00～16:00 兵庫県民会館パルテホール

※新型コロナウイルス感染拡大防止の観点から、無観客開催、YouTubeライブ配信

- ・ 参加者 ワークショップ参加団体より6校（1校 オンライン参加）35名
オンラインキャンプ参加者より2名、大人代表2名



■主催者等

主催 公益財団法人兵庫県青少年本部、兵庫県

共催 青少年のネットトラブル防止大作戦推進会議

コーディネーター 兵庫県立大学環境人間学部 竹内 和雄 准教授

ファシリテーター 一般社団法人ソーシャルメディア研究会 14名



■ひょうごネットトラブル防止ワークショップ

兵庫県青少年本部では、安心・安全なインターネット利用について、子どもたちが自ら学び、考える「ひょうごネットトラブル防止ワークショップ」を開催することとし、県下全域から参加者を募ったところ、8校1団体(中学校2校、高等学校6校、団体1)から参加申込みがあった。

ワークショップは、コーディネーターに兵庫県立大学環境人間学部 竹内 和雄 准教授を、ファシリテーターに一般社団法人ソーシャルメディア研究会の大学生を迎え、3回にわたって実施した。

～「ひょうごネットトラブル防止ワークショップ」参加校・団体～

- | | | |
|-------------|---------------|---------------|
| ・神戸市立渚中学校 | ・神戸市立平野中学校 | ・兵庫県立福崎高等学校 |
| ・兵庫県立千種高等学校 | ・兵庫県立加古川南高等学校 | ・兵庫県立赤穂高等学校 |
| ・兵庫県立尼崎高等学校 | ・兵庫県立小野工業高等学校 | ・淡路市ICTクラブ協議会 |

■第1回ワークショップ（令和2年9月13日）※オンライン開催

(※各参加校・団体をオンラインで繋ぎ、ファシリテーターを派遣して、参加生徒の活動状況を撮影)

○参加者 小5～高3 8校1団体 49名(小学生:2名、中学生:15名、高校生:32名)

○内 容

◇スマホ・ネットの良いところ、悪いところについて各学校で話し合い、発表

良いところ（主な意見）

- ・勉強に利用できる。
- ・ゲームやYouTubeが楽しい。
- ・位置情報が知れる。
- ・直接会わなくても、話ができる。
- ・撮りたい写真がすぐに撮れる。
- ・調べたいことがすぐ調べられる。
- ・クーポンがもらえる。
- ・予約や買い物が出来る。
- ・本や漫画が読める。
- ・音楽が聴ける(ストレス発散)。
- ・共通の趣味を持った人が見つかる。

悪いところ（主な意見）

- ・課金していく中で金銭感覚がなくなってしまう。
- ・勉強に集中出来なくなる。
- ・個人情報が漏れる、一瞬で広がる。
- ・感情がわからない。
- ・ネットを通じて「いじめ」などがおこる。
- ・便利すぎて使いすぎる。
- ・依存しやすい。
- ・しなければならないことを後回しにしてしまう。
- ・寝る時間が減る。
- ・匿名性があり、悪い人ともつながってしまう。
- ・情報に踊らされる。

◇スマホ・ネットを安全に安心して使うために「これからどのような事に取り組みたいか」について検討
《取り組んでみたいこと》

- ・ワークショップで話した内容を学校に戻ってみんなに知らせたい、共有したい。
- ・専門家(警察など)の意見を聞いて、考えたい。
- ・普段のゲームの時間などを考え直したい、ゲーム会社の人に話を聞いてみたい。
- ・依存対策や、体や心への悪影響を知りたい。
- ・YouTube、Instagram等でルールづくりの広告をしたい。 etc.



■第2回ワークショップ（令和2年10月11日）※オンライン開催

○参加者 小5～高3 7校1団体 39名(小学生:3名、中学生:14名、高校生:22名)

○内容

◇専門家によるオンライン講義・質疑応答

警察：兵庫県警察本部少年課

「SNSに起因する子どもの犯罪被害について」

SNSに起因する子どもの犯罪被害の件数や被害事例、被害に遭わないための注意点などについて講義。

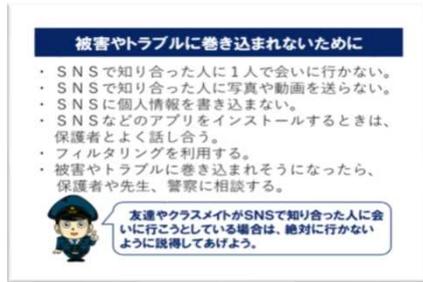
(主な質疑応答)

・被害に遭う割合の高い年齢は？

→15～17歳が被害の割合が大きいが、小学生も被害に遭っている。

・匿名の加害者の検挙は出来るのか？

→加害者のSNS投稿や被害者の証言から、住所・氏名を特定していくことで可能。



医療関係者：幸地クリニック

「ネット依存・ゲーム障害について～依存症についての基礎知識～」

依存症とはどのような症状をいうのか、依存症によって引き起こされる問題やその回復のためのキーワードなどについて講義。

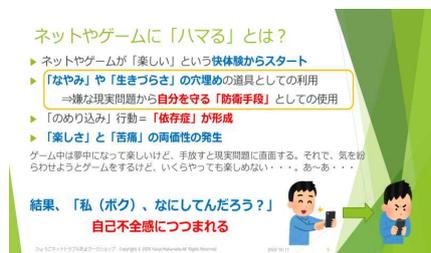
(主な質疑応答)

・依存しているとき、本人が自覚することは出来るのか？

→自覚することは難しい。学校に行かない、昼夜逆転などが出ているタイミングで周囲の人が先に気づくことが多い。

・もし依存症になったときに、抜け出す方法は？

→自分の中で、こういう人生を送りたいというものを形作ることが出来るようになると、解決の方向に動き出す。現実の喜びが増えてくると、大人の依存よりも、青少年の依存の方が解決しやすい。



ゲーム事業者：任天堂

「ゲーム機の進化とNintendo Switchのペアレンタルコントロール」

ゲーム機の進化と合わせたレーティング制度やペアレンタルコントロールの導入、残された課題などについて講義。

(主な質疑応答)

・みまもり機能の使用率はどれくらいか？

→アメリカやヨーロッパでもみまもり機能はあるが、日本が最も使用率が高い。

・みまもり機能を使うことで犯罪被害は減っているのか？

→Switchそのものがゲームに特化しているため、インターネットブラウザやカメラ機能もないため、出会い系の犯罪被害はほとんど聞かない。



◇専門家からの話を聞いたうえで、各学校や個人、グループで取り組みたい内容について検討

◇スマホサミットへ向けて、「ひょうごスマホ宣言2021」の候補案を共有

■第3回ワークショップ（令和2年12月13日・サミット当日）

○参加者 中1～高3 6校 35名(中学生:15名、高校生:20名)

○内容

◇これまでのワークショップで良かったこと、課題・反省点について発表

◇ワークショップメンバーからの提言(①国・自治体へ ②企業へ ③先生へ

④保護者へ ⑤自分へ)について検討

◇午後からのスマホサミットでの役割ごとに、打合せや進行確認、リハーサルを実施



■「スマホサミット in ひょうご2020」

令和2年12月13日 兵庫県民会館

青少年が安全に安心してインターネットを利用できるよう、青少年による主体的なインターネット利用のルールづくりについて、大人と子どもがともに考え、学び、取組の輪を広げる全県大会「スマホサミット in ひょうご2020」を開催。

本年度は、新型コロナウイルス感染拡大防止の為、無観客開催とし、YouTubeでのライブ配信を実施。

■開会宣言・スマホサミットへの道のり

参加校を代表して赤穂高校の代表より開会を宣言。

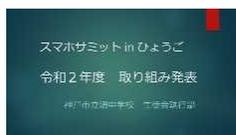
第1回ワークショップからサミットまでの活動についてまとめた動画「スマホサミットへの道のり」を紹介。



■ひょうごネットトラブル防止ワークショップ活動結果報告

「ひょうごネットトラブル防止ワークショップ」で話し合った内容や、専門家からの講義の内容をふまえ各学校で行った取組について、各校3分程度で発表。

神戸市立渚中学校



③ 啓発動画の台本検討



- ①「情報通信の安心安全な利用のための標語」を考える
- ②1日の時間の使い方を見える化する「タイムマネジメント」の取組
- ③スマホ・ネットに関するいじめ防止の啓発動画を台本から撮影まで自分たちで作成
- ④ひょうごネットトラブル防止ワークショップでの学びを学校全体で共有するため、校内スマホワークショップの実施

神戸市立平野中学校



「平野76スマイル宣言」

- ①スマホ・ネットに関するアンケートの実施・分析
- ②学年独自のスマホルールの作成
- ③自分のネット・モットーを作成し、筆入れして記念写真
- ④保護者とのタイアップ事業
 - ・学年保護者会で保護者へ協力をお願い
 - ・保護者向け啓発資料の作成・配付

76回生 スマホ3か条

画面の向こうの相手の気持ちを考えて
お金は限りあるもの 責任を持って
時間を守る 時間は取り戻せない



■ 文部科学省委託事業

「人とつながるオンラインキャンプ2020」結果報告

日常生活でのネット利用を見直したい青少年を対象に、今年度も実施した「人とつながるオンラインキャンプ2020」について、メンターを務めたソーシャルメディア研究会の大学生と実際にキャンプに参加した子どもたちが成果と感想を発表。

参加者からは、料理や川遊びなどキャンプで改めて感じたリアルの世界での楽しさを、日常生活でも増やしていきたいとの感想が述べられた。



■ 大人と子どもの公開討論会

公開討論会では、スマホサミット各参加校の代表と大人代表の2名が登壇し、コーディネーターである竹内准教授の進行のもと、神戸大学大学院医学研究科の曾良一郎教授の話も交えながら、青少年のインターネット利用について活発な意見交換が展開された。

○ネットのいじめ

「ネットでの悪口投稿を見たらどうするか」というアンケート結果を元に意見交換。

学年が上がるにつれ「止める」割合は減少し「何もしない」割合は増加するという結果に対し、子どもたちは「先生や大人に不用意に言うとおおごとになる」との意見を述べるが、一方で、「大人が介入しないと歯止めがきかない」「大人に言われれば、もうやめておこうというムードになる」との意見もあった。



○ネットの危険

ネットのへの投稿が写真から動画へと進化しているように、ネット社会はどんどん進化しているが、それとともにネットの危険性も高まっている。「ネット上で知らない人とやりとりをしたことがある、もしくは、友達などでやりとりしていると聞いたことがあるか」との問いに、会場に参加している多くの参加者が「○」と回答しており、引き続きSNS等に起因する犯罪被害への注意喚起が必要である。



○ネットの依存

神戸大学大学院医学研究科の曾良教授より、「ネット・ゲームをやめて空いた時間に何をするのが重要である」とのお話があり、参加者からも「受験勉強からの現実逃避でネットに逃げているところがあったが、ネットよりも面白いことを考えたい」「これまでのネットの時間を、将来の夢を叶えるための時間に使いたい」と前向きな意見が聞かれた。



討論会の中では、事前のワークショップの中で考えた子どもたちからの提言についても紹介。

【国・自治体への提言】

- ・ネット犯罪の取り締まりを厳しく！
- ・小学生以下の使用を制限してほしい
- ・フィルタリングを付ける法律を作してほしい
- ・ネットの使い過ぎをなくす法律を作してほしい
- ・1年間に使う分(時間)を決めてほしい
- ・極端な制限かけないで

【先生への提言】

- ・スマホの使い方の授業をしてほしい
- ・1年に1回は講演会を開いてほしい
- ・学校全体でルールを作りたい
- ・スマホルールを目立つ場所に貼ってほしい
- ・授業で依存について教えてほしい
- ・先生と一緒に利用のルールを作りたい
- ・自分たちのアンケートを配布してほしい

【自分への提言】

- ・時間を決めたい
- ・スマホ利用についてのルールをつくる
- ・テスト期間には触らないルールをつくる
- ・親と話し合ってルールを決める
- ・自分に厳しく
- ・ルールを作って守ろう
- ・スマホを見れない(使えない)時間を設定する

【企業への提言】

- ・時間制限アプリを使いやすくしてほしい
- ・制限機能のあるアプリを作してほしい
- ・TikTok、勝手に動画を終わらせてほしい
- ・YouTubeはずっと見てしまうので、見た時間を数値で示してほしい
- ・スマホを使い過ぎた場合の悪影響をCMIにして流す
- ・小学生未満への販売はやめてほしい
- ・悪影響のあるものは検索してもそもそも表示しないで

【保護者への提言】

- ・もっと注意してほしい、親も口だけじゃなく・・・
- ・ロック解除を頼まれても解除しないで！
- ・子どもに持たせるのが早過ぎる
- ・一方的に決めず、一緒に考えてほしい
- ・やめるきっかけを作してほしい
- ・小学生未満にスマホを使わせないで
- ・小さい子に制限し過ぎず、しなさ過ぎずに

討論に参加した大人からは「子どもたちから大人にもっと叱って欲しいと言う意見を聞いたことは、驚きだった」「子どもがゲームに熱中していると時ではなく、子ども自身が使い過ぎているなど思っているタイミングで話し合いたい」との感想を述べた。

討論会に参加した子どもたちからは、「今日の話、生徒だけではなく親にも聞かせたい」「もう自分たちの力だけでは手に負えなくなっている。大人たちの意見を借りつつ、自分たちのルールを決めたい」「ルールを決めるだけではなく、ネットの使い方をみんなが学ぶことでよくなっていくはず」との感想が述べられた。

最後に、司会を務めた参加者からも「頼れる大人に出会うこと、頼れる自分になることが大切」との感想が述べられ、大人と子どもがネットの利用について一緒に考えることの大切さが、改めて浮き彫りとなった。



■「ひょうごスマホ宣言2021」発表

ワークショップでの活動成果のひとつとして、青少年のネットやスマホの使い方に関する「ひょうごスマホ宣言2021」を決定し発表。

宣言は、各校・団体から候補を出し合い、投票で決定。それぞれの宣言に込めた願いを、作成した各学校から説明した。決定したスマホ宣言は、次年度の啓発活動などで広く活用される。



スマホサミット in ひょうご2020

ひょうごスマホ宣言2021

<時間>
忘れてない？ 時間は有限だってこと

<危険性>
まだ知らない 画面の奥の 人の気持ち

<フィルタリング>
スマホの戸締まりできていますか？

<人間関係>
その言葉 顔見て相手に 言えますか？



■総括

コーディネーターの総括に先立ち、ネットトラブル防止大作戦推進会議のメンバーでもある、神戸親和女子大学の金山教授より『納得と説得は違う』ということについて話があり、「親や先生から“説得”されたルールは守りにくい、自分自身が“納得”すれば行動に移すことができる」とし、そのためにお互い話し合い一緒に考えることが重要であると述べた。

コーディネーターは、過去のアンケート結果からも、親子の話し合いにより決められたルールは小・中・高校のいずれにおいても破られにくい(右上グラフ参照)と示すとともに、親子の話し合いによりネット依存を防止出来るのは小・中学校までであるとの考えを述べた(右下グラフ参照)。高校生になると親ではなく自分自身の判断で行動するようになると述べ、小・中学生の親子での話し合いの重要性と合わせ、高校生には自分自身をしっかりと見つめ直すきっかけが必要であることも強調した。



■閉会宣言

閉会にあたり、参加者からは「今まで考えたことのないことを考えるいい機会となった」「いじめや、ネットのことを自分事として考えていきたい」と今後に向けた前向きな意見が聞かれ、最後に赤穂高校の代表が「今日考えた事、感じたことをそれぞれ学校や家庭に持ち帰り、考え続けることが大切」と締めくくり閉会を宣言。



スマホサミットinひょうご2020を終えて

コーディネーター／推進会議座長
兵庫県立大学環境人間学部 准教授 竹内 和雄



1. 第7回を終えて

7回目の開催となった「スマホサミットinひょうご」は、いろいろな意味で新しいサミットであった。新しさへの転換はすべて、コロナ禍の影響であったが、結果的に、これからの子どもたちとスマホとの付き合い方を考えていく上で、非常に大きな示唆を得ることができたと考えている。

2. オンラインサミットの可能性と課題

①オンラインでの話し合いの可能性

今回のサミットは、基本的にオンラインで話し合った。違う場所にいる子どもたちがネット上で一堂に会し、問題意識を共有し、さらに積極的に意見交換を行った。子どもたちからは、「同じ画面上に同時に写ることで、ある程度一体感を感じることができた」等の感想を得ている。また「他の学校の人の意見をしっかり聞くことができた」「他に雑音がないので、人の意見に集中できた」等の声が聞かれた。

また、子どもたちからは「いろんな専門家の方の意見を聞くことができてとても勉強になった」という声が聞かれた。今回は、第2回ワークショップに、子どもたちからのリクエストに応じて、兵庫県警察、医療関係者（ネット依存関連）、ゲーム事業者（任天堂）にオンライン参加していただくことができた。県外からの参加もあり、リアルでの開催では難しいことがオンラインでは可能になった。オンラインであったが、子どもたちの質問に柔軟に返答いただき、子どもたちの満足度は極めて高かった。コロナの影響との兼ね合いになるが、来年度以降もオンラインでの話し合いの継続については十分に検討の価値があるだろう。

②来年以降への課題

いいこと尽くめのサミットと思えたが、昨年度に続いて参加した生徒に課題を聞いてみると、「実際に会って話していないので、話し合いはできたけど、仲良くなりきれなかった」と言う。2年続けて参加した生徒は異口同音に、「オンラインでも充実していたけど、やっぱりリアルで会う方が楽しい」と話す。

今年度得られた知見をもとに、来年度よりよいものにしていきたい。現時点では、①遠隔地のオンライン参加を認める、②専門家等はオンラインでの出席の可能性を含めて検討していただく、③可能な限り子どもたちは実際に集まって話し合えるようにする、の3点を挙げるができる。

3. 子どもたちの話し合いから見えてきたこと

参加校の生徒がそれぞれで自分たちの問題意識に応じて、専門家に質問して取組の方向性を見つけていく形式を取った。

問題意識はそれぞれで、ネット依存、ネットでの犯罪被害、SNSでのトラブル等、多岐に及んだが、子どもたちが最後に行った発表には共通点が多かった。

①自分たちには確かに多くの課題がある

子どもたち自身、自分たちのネット利用には、多くの課題があることは十分に理解しているようである。ある高校生は「自分たちだけではもう限界」と話していた。昨年までの彼らの自信満々の話し口調と大きく異なった。その理由は、コロナ禍での過度なネットへの傾倒である。「他にすることがなかったからある程度仕方なかったが、それでもやり過ぎてしまった」と多くの中高生が話していた。

②大人に助けを求めている

彼らが一様に求めたのは大人による関与であった。保護者や教師、専門家に対して「一緒に考えてほしい」と関与を強く求めた。特に「ゲームや動画がおもしろくてなかなかやめられない」とネットの長時間利用に歯止めがきかないことへの対策を求めた。驚いたことに、今回の参加者の半数近くは、「ネットの利用時間についての条例等の決まりがあっても良い」と考えている。

③強制ではなく一緒に考えてほしい

彼らが強調したのはこの部分で、「大人が勝手に決めるのではなく、子どもの意見もしっかり聞いてほしい。その上で対策を一緒に考えてほしい」「私たちも悪いが、私たちには私たちなりの事情がある。そのあたりはわかってほしい」と言う。コロナで10年分くらい時代が進んだのであろう。10年追いつくために、私たちの社会は、社会全体でネット問題に取り組む必要がある。社会全体とは、学校、地域、家庭だけでなく、企業や行政も含む。また子どもたち自身もしっかり関与させて、高度情報化社会にふさわしいネットルールを確立していく必要があるだろう。

4. これからに向けて

以上のように、今年のサミットでいろいろなことが見えてきた。来年度は、サミットでの話し合いが社会全体で享受できるようなシステムづくりをしていくことが急務だろう。近隣県では、子どもの過度のゲーム使用に歯止めをきかせるべく条例がつけられた。私たち兵庫県では、対策として何が必要で何が必要でないか、しっかりと議論していく必要があるだろう。



■事業成果と今後の展望

■ワークショップによる青少年の主体的な取組

ワークショップでの話し合いや警察、医療関係者などの話を聞くことにより、子どもたちの中でこれまで漠然としていたスマホ・ネット利用に関する課題や危険性などを改めて認識することができ、どのようにネットと付き合っていけば良いのかを考える良いきっかけとなった。

また、ワークショップでの取組やスマホサミットを通して、子どもたちがスマホ・ネットの問題を自分事として捉え、「学んだことを自分たちでとどめるのではなく、学校で広めたい。」「自分たちが主体となって同じようなワークショップをする。」「学校で新しいスマホのルールを決めることができた。」など、ネットの問題にどのように取り組んでいけば良いのかを具体的にイメージし、それを実行するところまで経験できたことは、今後各学校において取組を進めていく上でも非常に有意義な経験であった。

■効果的なルールづくりのポイント

スマホサミットで発表したネット利用に関する子どもたちからの提言では、「先生と一緒にルールをつくりたい。」「ルールは一方向的に決めず、一緒に考えて欲しい。」「話し合ってルールを決める。」など、学校でも家庭においても、話し合いを行ったうえで一緒にルールをつくりたいという提言が多く見られ、効果的なルールづくりのポイントのひとつとして「話し合いによるルールづくり」の取組を引き続き推進していきたい。

また、スマホサミットの公開討論会では、大人も交えて意見交換を行い、子どもたちの大人に対する正直な意見も引き出すことができた。「大人対子ども」の構図ではなく、「大人と子ども」でネット問題について一緒に考えることが大切である。

■課題と今後の展望

子どもたちの提言からも見てとれるように、「使い過ぎをなくす法律を作って欲しい」「制限機能のあるアプリを作って欲しい」「時間がきたら自動的に動画を終わらせて欲しい」「親にもっと注意して欲しい」と、子どもたちのネット利用の現状は、もはや自分たちでは手に負えず、大人の強制力を必要としている状況になりつつある。大人の意見と、自分自身が納得できるルールを、大人と一緒に考えながら進めていくことが、今後の課題であり、理想的なルールづくりのかたちでもある。

現状では、ネットの利用時間を減らすことばかりに目を向けがちであるが、「ネットの利用時間を減らした後の空いた時間に何をするのか」を考えることが重要であり、「ネット問題の解決の糸口は、ネットの中ではなくリアルの中にある」というコーディネーターの言葉のとおり、好きな読書をする、将来の夢に向かって勉強する、趣味で楽器を始めるなど、リアルの世界での充実というシンプルなものである。話し合いによる効果的なルールづくりと合わせ、子どもたちがリアルの世界の充実に目を向けていけるような働きかけも、今後の重要な取組のひとつとして推進していく必要がある。



■ 青少年のネットトラブル防止大作戦推進会議

本事業の実施においては、(公財)兵庫県青少年本部を事務局とし、青少年のネットトラブル防止に向けた保護者等に対する普及啓発強化策や、県民運動展開の実施方策を検討している「青少年のネットトラブル防止大作戦推進会議」を事業検討委員会に位置づけ、事業内容等の検討を行った。

■ 青少年のネットトラブル防止大作戦推進会議の構成

- ・ 兵庫県立大学環境人間学部 竹内和雄 准教授【座長】
- ・ 神戸親和女子大学発達教育学部 金山健一 教授
- ・ 神戸大学大学院医学研究科 曾良一郎 教授
- ・ 幸地クリニック
- ・ 兵庫県立神出学園
- ・ 兵庫県立いえしま自然体験センター
- ・ 兵庫県青少年団体連絡協議会
- ・ 兵庫県PTA協議会
- ・ こころ豊かななづくり500人委員会阪神南OB会
- ・ 地方青少年本部（東播磨）
- ・ 株式会社神戸新聞社
- ・ 株式会社朝日新聞社阪神支局
- ・ 株式会社サンテレビジョン
- ・ 日本放送協会神戸放送局
- ・ 株式会社ドコモCS関西神戸支店
- ・ 兵庫県教育委員会事務局教育企画課
- ・ 神戸市教育委員会事務局学校教育部学校教育課
- ・ 兵庫県警察本部生活安全部サイバー犯罪対策課
- ・ 兵庫県警察本部生活安全部少年課
- ・ 兵庫県企画県民部女性青少年局青少年課
- ・ 公益財団法人兵庫県青少年本部【事務局】

■ 検討経過

回	日 時	検討内容
		主な意見等
第1回	6月22日 (月)	<p>①令和2年度「青少年のネットトラブル防止大作戦」について ②「ひょうごネットトラブル防止ワークショップ」について ※コロナの影響による各事業の実施方法、日程、場所の変更等について説明</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ ゲーム依存の子どもは、食事よりもゲームを優先させてしまう状況が続くことで摂食障害に相当するような状態になっていることが多く、その関係性を調査する必要がある。 ・ ネット利用の低年齢化が進行しており、小学校に入学するタイミングで交通ルールを学んだり予防接種を受けるように、ネットのルールについて教えたり、ネット利用における予防接種にあたるものは何なのかを考え対策する必要がある。 ・ これまでのネットの負の側面を強調した取組から、今後はネットの正しい使い方を通じて子どもたちに再認識してもらったり、子どもたちが情報発信できる場を多く用意するなどの新しい取組が必要である。
第2回	10月19日 (月)	<p>①第1回・第2回「ひょうごネットトラブル防止ワークショップ」実施報告 ②「スマホサミットinひょうご2020」に向けた今後の予定について</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ コロナ対策としてオンライン形式でのワークショップを実施したが、昨年度を大きく上回る参加人数で、参加者や先生からも、自分たちの学校でワークショップを実施したいという意見を多数いただいた。今後は新しい実施方法のひとつとして取り入れていきたい。 ・ 第2回ワークショップで専門家が分かりやすく説明をしてくれことで、子どもたちが「腑に落ちる」(＝心に落とし込む大切さを学ぶ)ことが出来たのではないかと感じた。 ・ 子どもは、依存になつたらまずいということは承知の上で使用している子の方が多いのではないか。ネットやデジタルのことよく知らない大人が、子どもは何も知らない弱者だという視点で、ネットを悪と決めつけて言葉を発しても子どもには届かない。 ・ 知らない子どもに教えようではなく、大人と一緒に考えようというスタンスが良い。
第3回	2月22日 (月)	<p>①事業総括 ②報告書の作成・提出について ③「ルールづくりのポイント」について ④令和3年度「青少年のネットトラブル防止大作戦」について</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 実際に集まって話し合うことは大切だが、現場にいなくても情報発信できるというオンラインの可能性を感じた。 ・ ルールをつくる時には、子どもたちだけにルールを押しつけるのではなく、大人も自制する必要がある。大人も一緒に守れるようなルールをつくるのが大切である。 ・ ルールはあくまでも手段であり、ルールを決めることが目的にならないようにしなければならない。 ・ ネットは安全ではない。子どもたちの安全を守るために、大人として、行政として、マスコミとして、医療として、それぞれの立場で対策に取り組んでいくことが大切である。



ひょうごネットトラブル防止ワークショップ スタッフ

コーディネーター

兵庫県立大学環境人間学部准教授 竹内 和雄

ファシリテーター

一般社団法人ソーシャルメディア研究会

田中 成夢	藤城 美穂	松本 健吾	赤松 七海	緒方 麻椰
玉野 真羽	藤本 奈那	桑鶴 碧衣	袖之上華乃	辻川 想
三木茉奈美	吉田 航	渡辺 鈴	山本 あい	竹内 義博 (技術サポート)

事務局

公益財団法人兵庫県青少年本部

梅谷 順子	神崎 敏道	竹谷 貴子	大西 正子	笠井 信介
板村 裕美	別府 大悟	半矢 竜幸		

本事業の問い合わせ先

公益財団法人兵庫県青少年本部 企画部 (県民運動担当)

Addr : 〒650-8567 神戸市中央区下山手通5-10-1 兵庫県企画県民部女性青少年局青少年課内

Tel:078-362-3142 E-mail:seishonen@pref.hyogo.lg.jp Web:https://www.seishonen.or.jp/